

「とんど」と「とんどまち」

「とんど」(注1)ということばは、広辞苑によると、小正月(1月15日)に門松・竹・注連縄(しめなわ)などを集めて焚く習俗であると書かれている。この地方でも勿論この風習はあった。(注2)ただし一般にたき火をすることも「とんど」と言っていた。

ところで、私の家の前の田んぼは通称「とんどまち」と言われていた。(注3)「まち」を漢字で書けば「町」であろう。「町」の字はいろいろの意味を持つが、ここでは、田んぼの区画の単位という意味に解釈すべきであろう。(例・・・田植えが済みましたかなあ・・・まだ「ふたまち」も残っとなです・・・と言う場合、田んぼ2枚という意味の「まち」)したがって、「とんどまち」とは「とんど」をする(一枚の)田んぼと言うことである。

なぜこのような名前がついたかという、その田んぼの東南の隅、いまの「田中野田バス停」附近の一画が、昔は高田で稲も作れず空地だったので、正月にはむらの人が「おかざり」を持ちよって焚いたり、寒い日には付近の人が寄って「とんど」をしていたそうで、何時とはなしに「とんどまち」といわれるようになったと聞いている。

私がこどもの時にはここはもう水田になっていて、「とんど」はできなくなっていたが、その名前だけは残っていた。そしてその当時、「とんどまち」を一周してこいと、こわい上級生の命令でこの田んぼの周りをよく走らされたものである。いまは「とんどまち」の名前を知っている人は少なくなってしまった。

なお、「とんど」に関連してのことをついでに少し書かしてもらう。私のこどもの頃、農繁期の終わった冬の間大人の男たちは、藁(わら)細工に精をだしていた。「わらじ」や「ぞうり」もつくられたが主としては米の俵づくりである。縄をない藁を編むのである。こんなとき、個々の家でなく私の家の納屋などに何人かが集まって雑談しながら楽しく作業していた。寒い朝などは、藁仕事で出てきたわらくづで「とんど」をして暖をとっていた。「とんど」にしても、その頃は何でも自由に燃やせたわけではない。稲藁でも籾殻でも、炊事や風呂焚きの貴重な燃料だったからである。それでも足りなくて、笹ヶ瀬川の葦をも焚物にしていた。また、川を流れる木切れ一つも拾い上げて燃料の足しにしたのである。昔からし尿も肥やしにしていたくらいだから、家の周囲、家の中、身の回りのもので役に立たないと廃棄するものは何一つなかったと言ってよい。

電気・ガスの普及した現在では、家を新築するにあたって、古い家は昔のように解体して、不要なものであっても木材ならとっておいて燃料にする、などという気遣いはもう無しである。すぐ取り壊して焼き棄ててしまう。我が家がそうであった。古い家の材木を取っておいたら、10年くらいは燃料に使えたかも。

最近は「非常事態宣言」がでるほど集積場はゴミの山である。冥途とやらへ連絡が取れるものなら、この有様を先祖様へ知らせてやりたいものと思う。どう言われるであろうか？

「もったいないことをしとる」ときついお叱りをうけるにちがいない。と言っても軽くは聞き流せない。半世紀もすれば、原油も枯渇する。諸事節約の時代が再来するかもしれない。

「とんど」が、つい横道にそれてしまった。お許しを。

注1 「とんど」という言葉は、一般には「どんど」と言われいているようである。

注2 私がこどもの頃は、まだ、盆・正月等は旧暦を使っていた。これは、農作業の都合もあってのことで、当時としては、やむを得なかったわけである。

なお、小正月と言えは、この地方では2月1日であるが、一般的でないようである。

注3 人に名前があるように、土地にも公につけられた名前がある。「とんどまち」の公称地名は「前場」(まえば)である。(区画整理が完了すれば、この地名もなくなる。)

平成5年1月号 第25号
(中 尾 佐之吉)